https://rodosoken.com/

関する議論が行われていることが注目される。その中でも、ホームレスの統計上の概念と数をめぐる議論には興味をそそられるところである。また、失業に関してもその概念と数量についても大変参考になると思われる。

(2003年７月・北大図書刊行会刊・6800円)

（かねざわ　せいいち・理事・佛教大学教授）

ジル・A. フレイザー著
『窒息するオフィス・仕事に強迫されるアメリカ人』

田村　考司

Ⅰ　本書の概要

本書は、ニューエコノミーといわれた1990年代アメリカの好景気がホワイトカラーに強いていた過酷な労働実態を、数多くのインタビューに基づいて暴きだした著作である。著者は、アメリカの職場生活が「搾取工場」となっており、それが中長期的にアメリカ企業、ひいてはアメリカ経済・社会に損失を与えることに警鐘を鳴らし、「搾取工場」から抜け出す道を模索しようとしている。

全体は序章、第１～９章、終章から構成されるが、内容的には次のように区分できる。1990年代において労働時間・給与・企業福祉といった労働条件の悪化がいかに進んだのか（第１～４章）、第２次大戦以後の家族主義的な労働慣行から「ホワイトカラー搾取工場」への変化がいかに生じたのか（第５・６章）、ニューエコノミーの典型であるハイテク産業と、「搾取工場」を先取りした銀行業等における労働者の職場生活はどのようなものか（第７・８章）、「搾取工場」を正当化しようとする大手企業の社内広報（第９章）、である。最後に著者はこうした状況から抜け出すための方策を提起している（終章）。

Ⅱ　本書の意義

第１は、この20年間を通じてアメリカ人の職場生活が「ホワイトカラー搾取工場」へと変貌してしまった様子がリアルに描かれている点にある。アメリカの職場は「搾取工場」という概念とは全く無縁のもののように思われるが、人員削減・非正規労働者への転換・長時間労働・給与引下げ・企業福祉削減など過酷な実態がインタビューを通じて明らかになるにつれて、「搾取工場」がアメリカの労働実態を適切に表現する概念であると納得させられる。

第２は、「ホワイトカラー搾取工場」がアメリカ経済の構造変化との関連で必然的に生じたことを明らかにしている点である。家族主義的なアメリカの労働慣行を「搾取工場」へと後退させたアメリカ経済の構造変化とは、日本など諸外国企業との競争（グローバリゼーション）と株価至上主義経営の２つであった。この構造変化は1990年代には空前の好景気をもたらしたが、同時に職場の「搾取工場」化も一層進行させたのである。この分析から、「アメリカ人は終身雇用を望んでいない。」「アメリカ人は能力主義に基づく処遇を求める。」といった日本で一般的に抱かれている印象が誤っていることもわかる。

第３は、日本労働者の明日の姿――現在といってよいが――を指し示している点である。現在、日本でもアメリカをモデルとした労働市場改革が大手企業・政府によって進められており、日本の労働者を「搾取工場」へ押し込めようとする力が働いている。日本の労働者はアメリカの経験から、こうした労働市場改革は個別大手企業には短期的な収益をもたらすが、中長期的には日本経済の回復にはつながらず、日本社会を荒廃させてしまうことを学べるだろう。

著者は、多くのアメリカの労働者から「あなたはまさに私の生活について書いています。」と言われたそうであるが、本書の内容は競争万能主義に苦しめられている日本の労働者にも共感をもってもらえるものであり、時宜にかなった好著であるので、多くの労働者の方々に読んでいただきたいと思う。

(2003年5月・岩波書店刊・2300円)

（たむら　こうじ・桜美林大学教授）